特集　藤原定家 ―『明月記』とその書―

本館3-1室・3-2室　2023年6月27日(火)～8月6日(日)

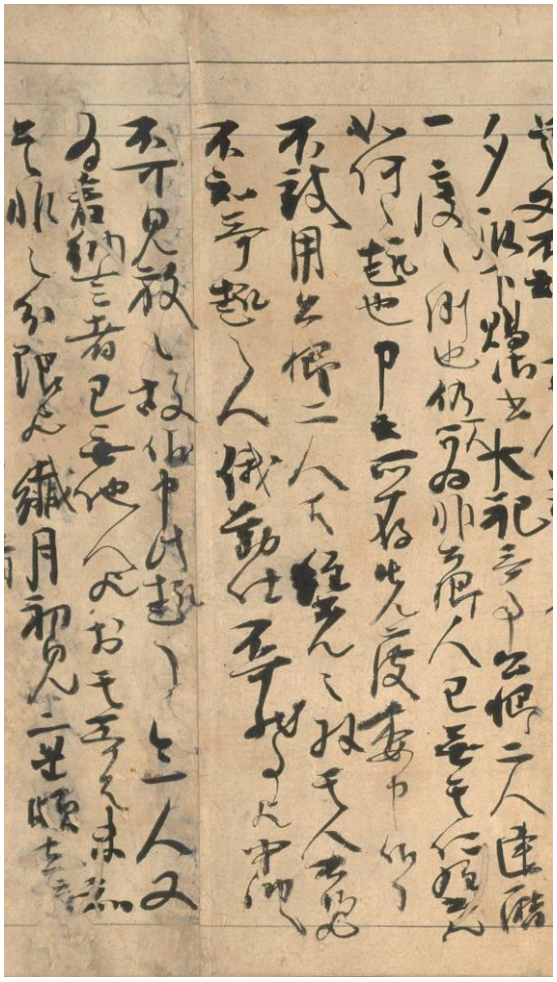
展示作品釈文※

※当館蔵品のみ掲載

重要文化財

明月記　天福元年(一二三三)六月　一巻(部分)

(展示期間　二〇二三年六月二十七日〈火〉～七月十七日〈月・祝〉)



(六月三日)

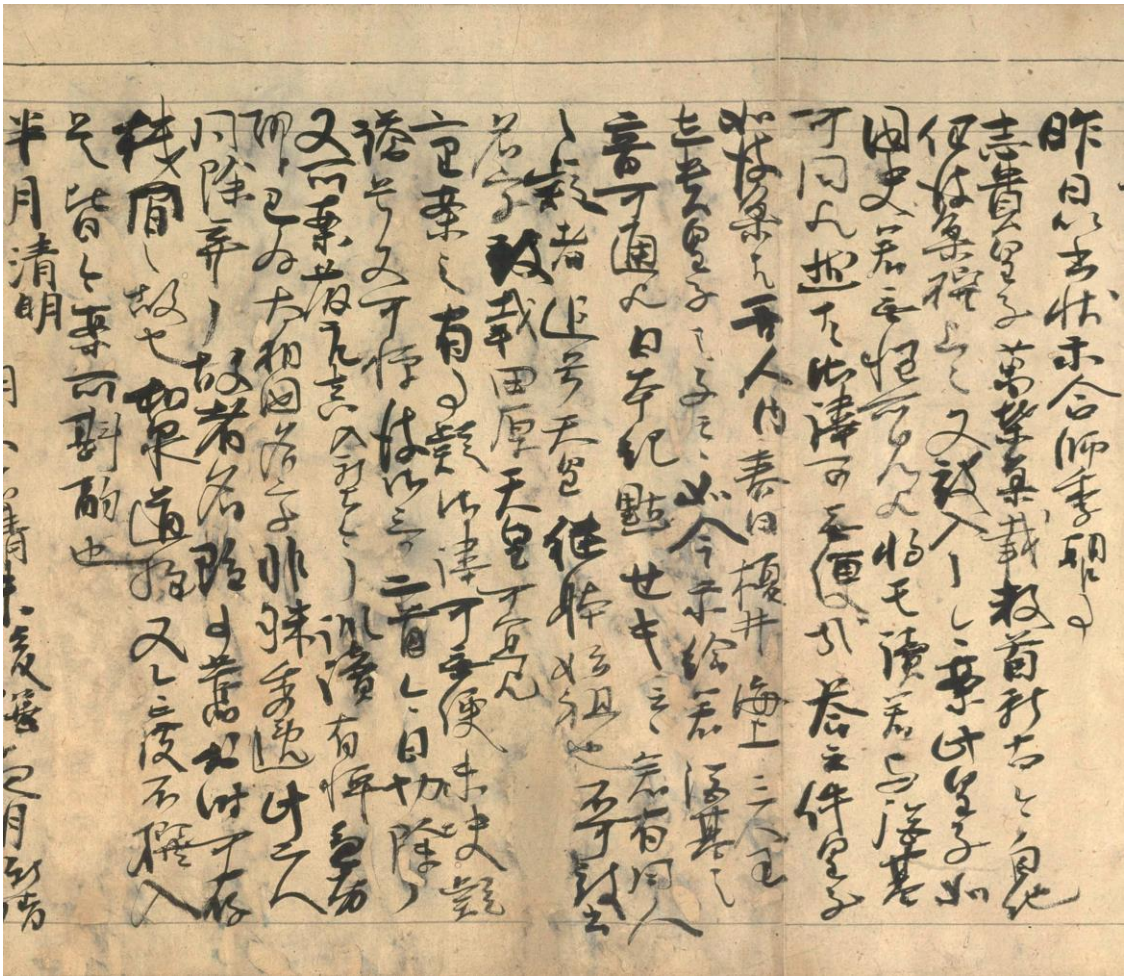
夕、殿下賜御書、大祀歌事、公卿二人、建暦
一度之例也、仍可為非公卿人、已無其仁、経光
如何之趣也、申云、所存先度委申候了、
不被用公卿二人者、経光之外、其人不候歟、
不知歌趣之人、俄勤仕、不可然事歟、中納言
不可見放之故候、申此趣了、今一人、又
為若納言者、已無他人歟、於其歌者、未知
是非之分限歟、織月初見、二星頗去云々、

天福元年6月3日、摂政の九条教実(殿下)から定家のもとに、四条天皇の大嘗会(大祀)の屏風和歌を担当する歌人2名の選考について、相談の手紙が届きます。先例により、うち1名を公卿以外から選びたいという相談に対し、定家は、その条件に適うのは藤原経光の他にいないと回答しています。

重要文化財

明月記　天福元年（一二三三）六月　一巻（部分）

（展示期間　二〇二三年六月二十七日〈火〉～七月十七日〈月・祝〉）



（六月八日）

昨日、以書状、示合師季朝臣事、
志貴皇子、萬葉集載数首、新古今、自他
任彼集撰上之、又被入了、今案、此皇子、如
国史、若無慥所見歟、将其読、若与施基
可同歟、然者御諱可無便哉、答云、件皇子、
如彼集者、歌人内、春日・榎井・海上三人王、
志貴皇子之子云々、如今示給、若施基之
音可通歟、日本紀点せキ云々、若有同人
之疑者、追号天皇、継体始祖也、不可被書
名字、被載田原天皇、可宜歟、
重案之、有事疑、御諱可無便、未決疑、
諡号又可憚、彼御歌二首、今日切除了、
又所案、藤元真入新古今了、訓読有憚、兼房
朝臣、已為太相国名字、非殊秀逸、此二人
同除棄了、故者名、雖事旧、於時可存
機間之故也、和泉道経、又今度不撰入、
是皆今案所斟酌也、
半月清明、

天福元年６月８日、定家は『新勅撰和歌集』入集の候補としていた万葉歌人、「志貴皇子」について考証しています。国史に詳しい中原師季に問い合わせた結果、今上天皇の直系にあたる「施基皇子」と同一人物の可能性があり、諱を使用するのは不適切だと考えて、定家は草稿から志貴皇子の部分を切除しました。

明月記　嘉禄元年（一二二五）秋・同三年夏　一巻（部分）

（展示期間　二〇二三年七月十九日〈水〉～八月六日〈日〉）

（嘉禄元年七月）

十九日　　遥漢晴明、

夜前暑気頗宜、朝間似秋気、

巳時、東方女房冷泉母儀、書状到来、十一日被終之由

告送、件状即覧相門了、他方音信未通云々、

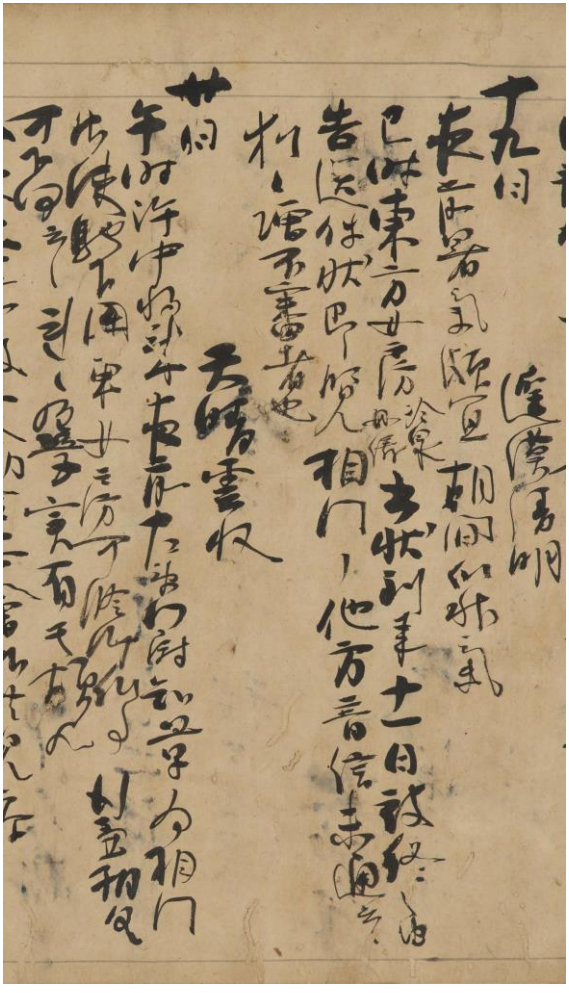
猶々増不審者也、

廿日　　天晴雲収、

午時許、中将来、夜前左衛門尉知景、為相門

御使馳下、関東女房可修御仏事、行兼相具

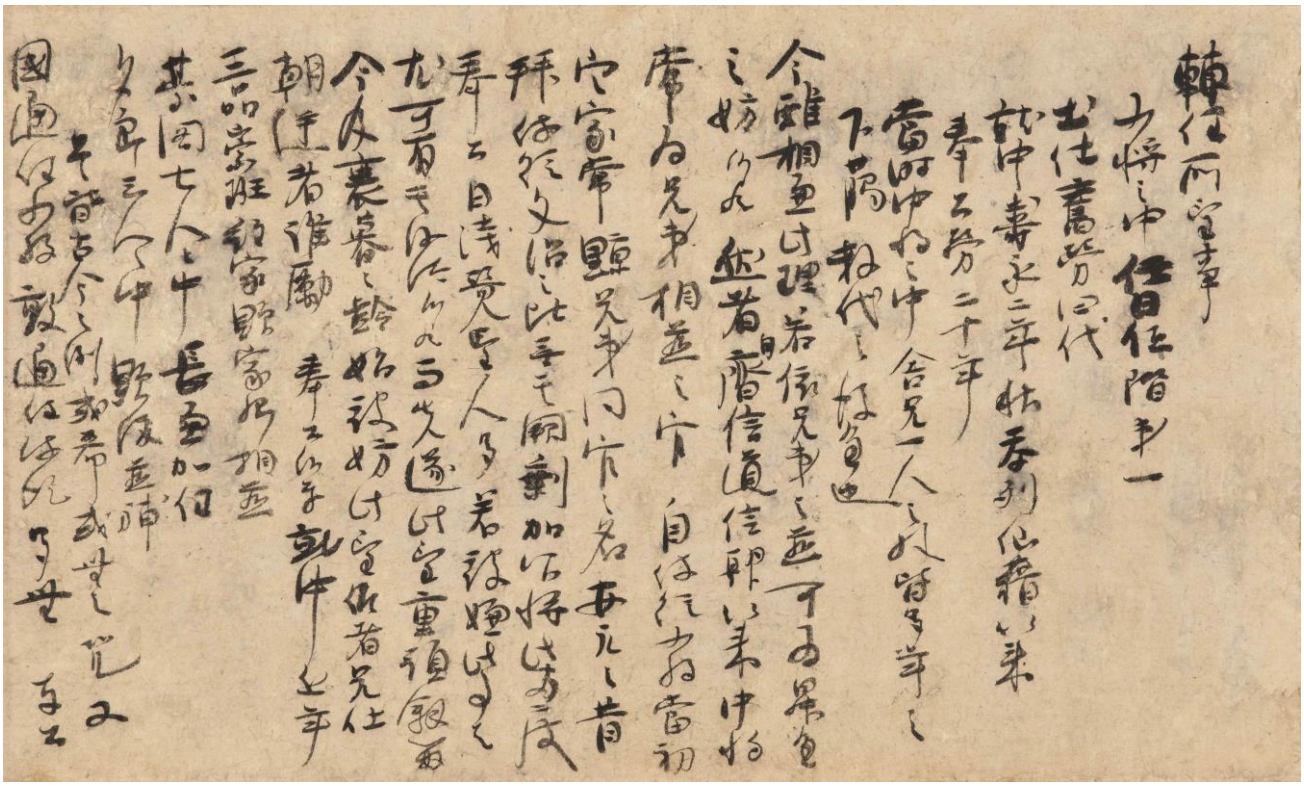
可下向云々、連々経営、実有其煩歟、



嘉禄元年7月19日、定家は名前を明記していませんが、去る11日に鎌倉の北条政子が死去したという情報を入手します。定家の子為家の妻が、北条時政（政子の父）の孫娘だったため、その為家の妻の母（東方女房）から届いた一報でした。

重要文化財

申文　藤原定家筆　一幅



（前半）

転任所望事

少将之中、任日位階第一、

出仕旧労四代、

就中寿永二年秋、忝列仙籍以来、

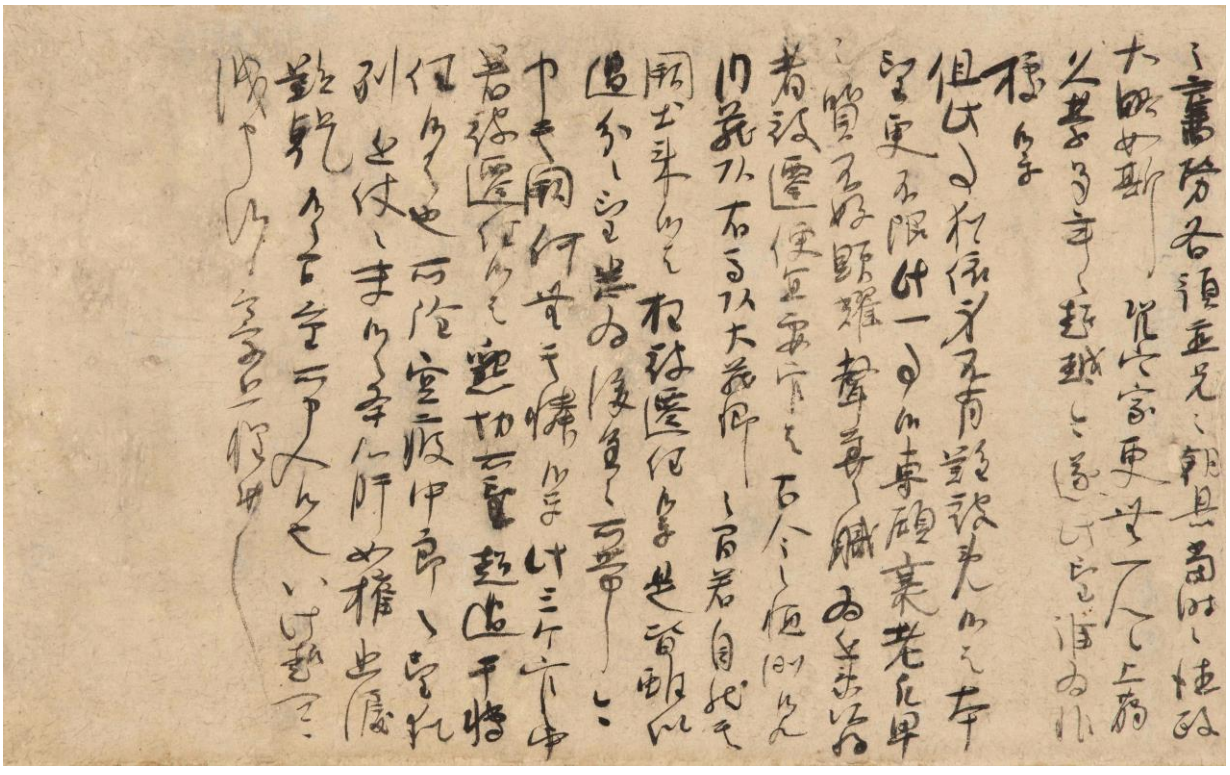
奉公労二十年、

当時中将之中、舎兄一人之外、皆多年之下臈、数代之後進也、

今雖相兼此理、若依兄弟之並、可為昇進之妨候歟、然者、自斉信・道信朝臣以来、中将常為兄弟相並之官、自侍従少将当初、定家常黙兄弟同官之名、安元之昔、拝侍従、文治之比、無其闕、剰加次将、此両度、奉公日浅、競望人多、若被嫌此事者、尤可有其沙汰候歟、而先遂此望、重預叙留、今及衰暮之齢、始被妨此望候者、兄仕朝廷者、誰励　奉公候乎、就中近年、三品崇班、経家・顕家卿相並、台閣七人之中、長兼加任、夕郎三人之中、顕俊並補、

是皆古今之例、或希或無之、況又国通任少将、敦通任侍従、多無　奉公

（後半）

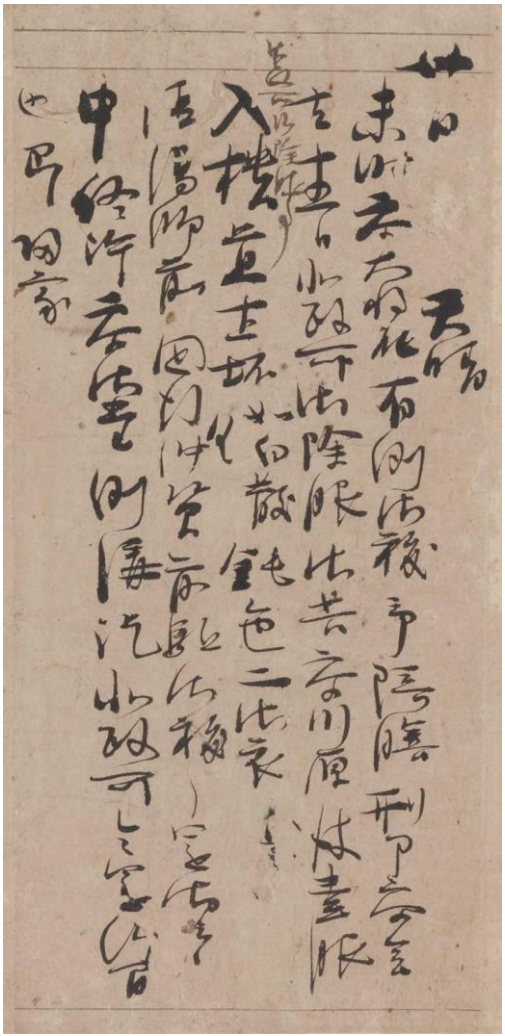


之旧労、各預並兄之朝恩、当時之徳政、
大略如斯、況定家、更無一人之上臈、
久蒙多年之超越、今遂此望、誰為非
拠候乎、
但此事、猶依身不肖、難被免候者、本
望更不限此一事候、専顧衰老凡卑
之質、不好顕耀声華之職、為近衛次将
者、被遷便宜要官者、古今之恒例候歟、
内蔵頭・右馬頭・大蔵卿之間、若自然其
闕出来候者、枉被遷任候乎、是皆雖似
過分之望、悉為後進之所帯、今
申其闕、何無其憐候乎、此三ヶ官之中、
若被遷任候者、懇切所望超過于転
任候者也、所詮空疲中郎之望、猶
列近仗之末候之条、心肝如摧、悲涙
難乾候之間、重所申入候也、以此趣、可令
洩申給候、定家恐惶謹言、

明月記断簡　建久五年(一一九四)十一月二十日　一幅

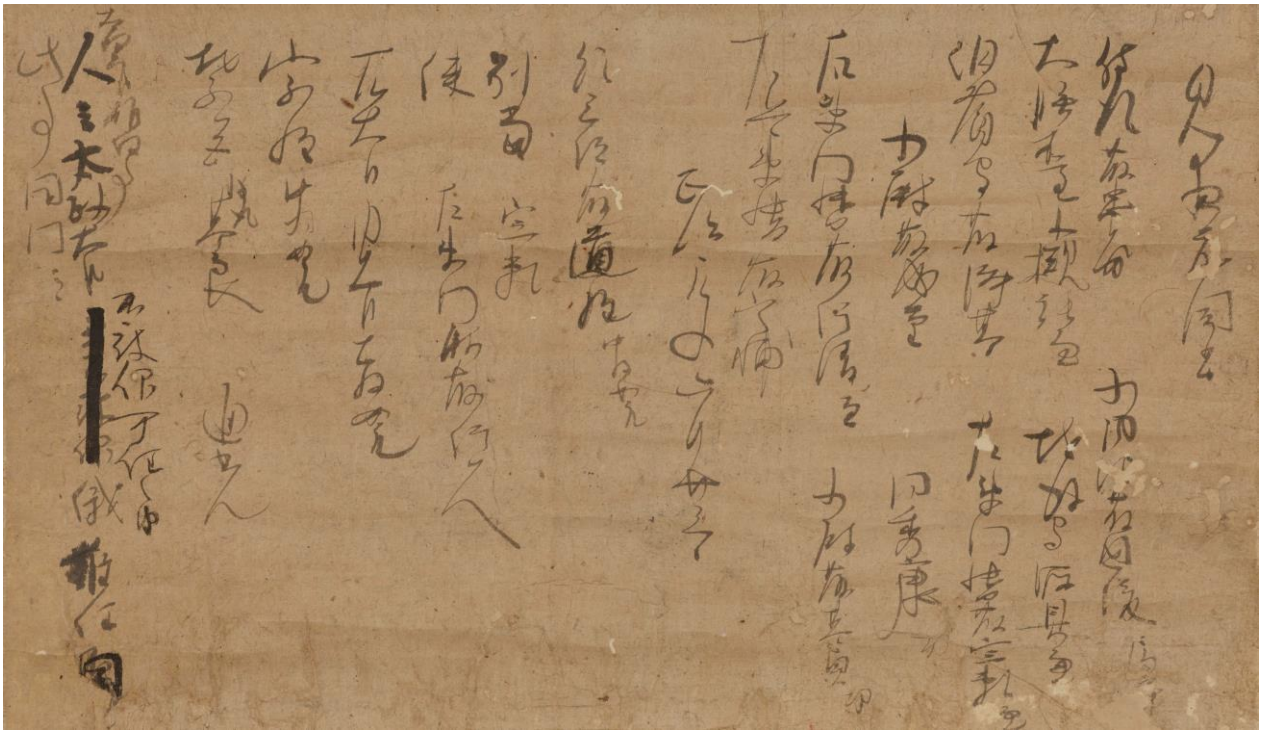
廿日　　天晴

未時、参大将殿、有例御祓、予陪膳、刑部参会、
去十五日、北政所御除服、御供参川原、彼素服「北政所御除服事」入櫃、置土坏如白散具、鈍色二御衣□□
陰陽師前、国行・仲資前駆、御祓了、還御云々、
申終許、参御堂、例講訖、北政所令還給間
也、即帰家、



明月記断簡

正治元年(一一九九)六月二十四日　一幅



見夜前聞書

侍従藤忠房　　少内記藤国俊 局挙、

大膳権亮小槻能兼　越後守源具兼

伯耆守藤済基　　左衛門督藤宗頼 兼、

少尉藤成重　　同秀康 功、

右衛門督藤信清 兼、　少尉藤基員 功、

左兵衛督藤定輔

正治元年六月廿三日

従三位藤道経 中将如元、

別当　宗頼

使　左衛門尉藤信久

右大臣　内大臣 大将如元、

家経 中将如元、

禁色　侍従 基良　通光

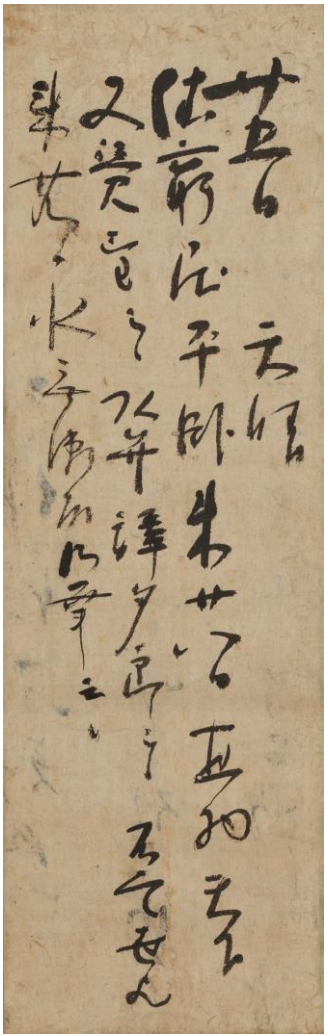
「太政大臣推任事」 不被仰可任之由

人云、太政大臣■■■■俄推任、聞

此事、閉門云々、

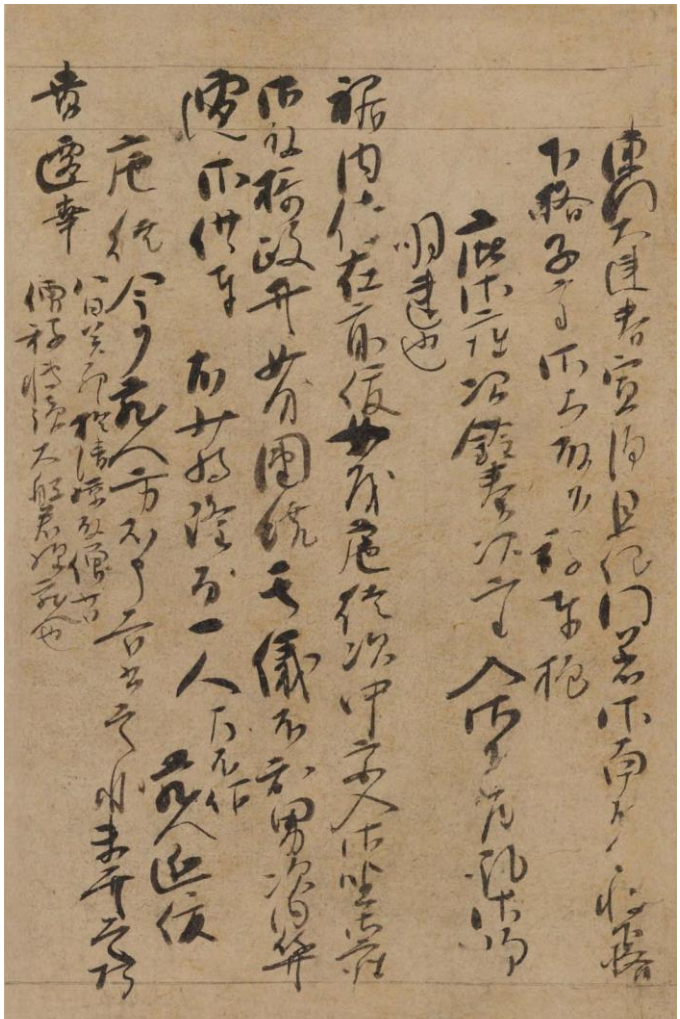
明月記断簡　建暦元年（一二一一）七月二十五日　一幅

廿五日　天晴
依窮屈平臥、来廿八日直物、天下
又競望云々、頭弁辞夕郎云々、不定世歟、
来廿九日、水無瀬殿御幸云々、

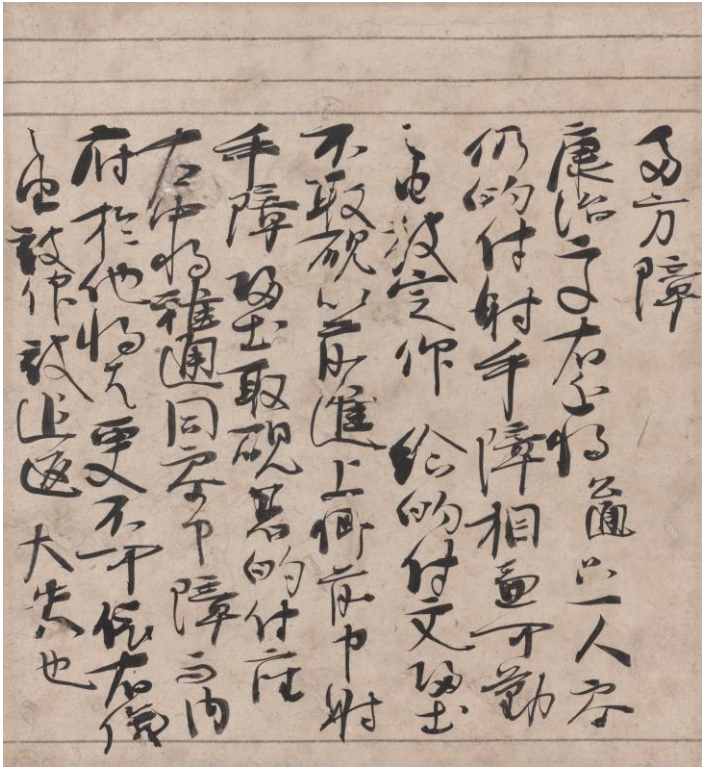


兵範記断簡　仁安二年(一一六七)七月七日　一幅

東門大、建春・宣陽・日花門、着御南殿、近将下格
下格子、主上御大殿下被奉抱、
庇御座、次鈴奏、次主上入御、下官取御陽
明建也、
裾内侍在前後、女房扈従、次中宮入御、坐御座
御殿、摂政并女房囲繞、其儀不知男、次内侍所
遷御、供奉右少将隆房一人左不候、蔵人延俊
扈従、今夕蔵人方不申吉書、是非未弁、乞巧
奠遷幸、八日癸卯、於清涼殿、僧廿口
僧被転読大般若経蔵人也、

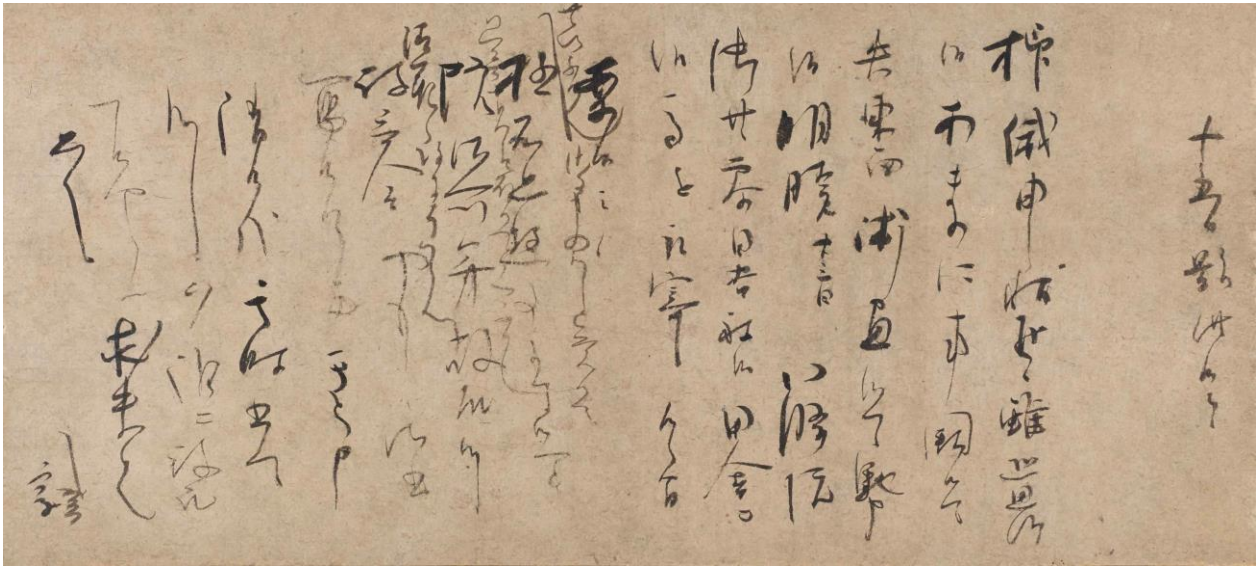


記録切（賭射）　一幅



両方障、
康治二年、右近将公通、只一人参、
仍的付射手障、相兼可勤
之由被定仰、給的付文、帰出、
不取硯以前、進上卿前、申射
手障、帰出取硯、着的付座、
左中将雅通同参、申障、而内
府、於他将者、更不可依右儀
之由被仰、被追返、大失也、

書状　藤原定家筆　一幅



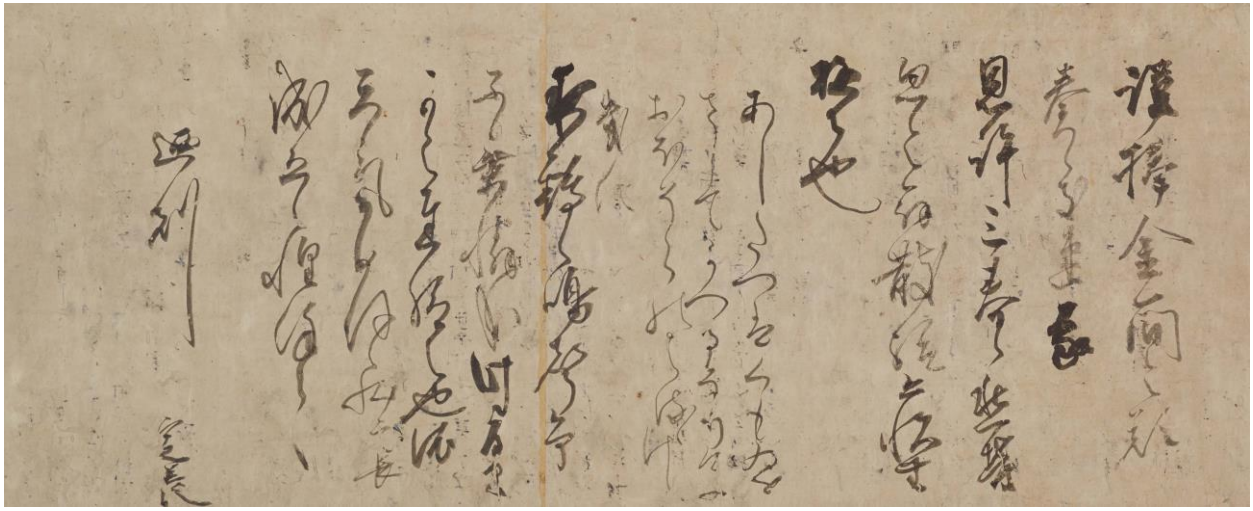
十五日影供候云々、

抑俄申状、返々雖恐思給
候、あまりに事闕候て、
失東西、術尽候て、馳申
候、明暁十三日、八条院
御共参日吉社候、田舎ニ
候馬を取寄候之間、
案候云々、

「共以不見、さる事の候しと覚候て、」
極不思懸事にて候へと、
「送歌一見之由、存候へと、写候也、」
院御所并故殿候し
「清範之許にそ候らん、」
詩歌合やもし御書
写候けむ、きと申
請候哉、其時書て
候しヲ、誰ニ被取
て候やらん、求失候也、
恐々謹言

「資実カ」
定家

書状　藤原定長筆　一幅



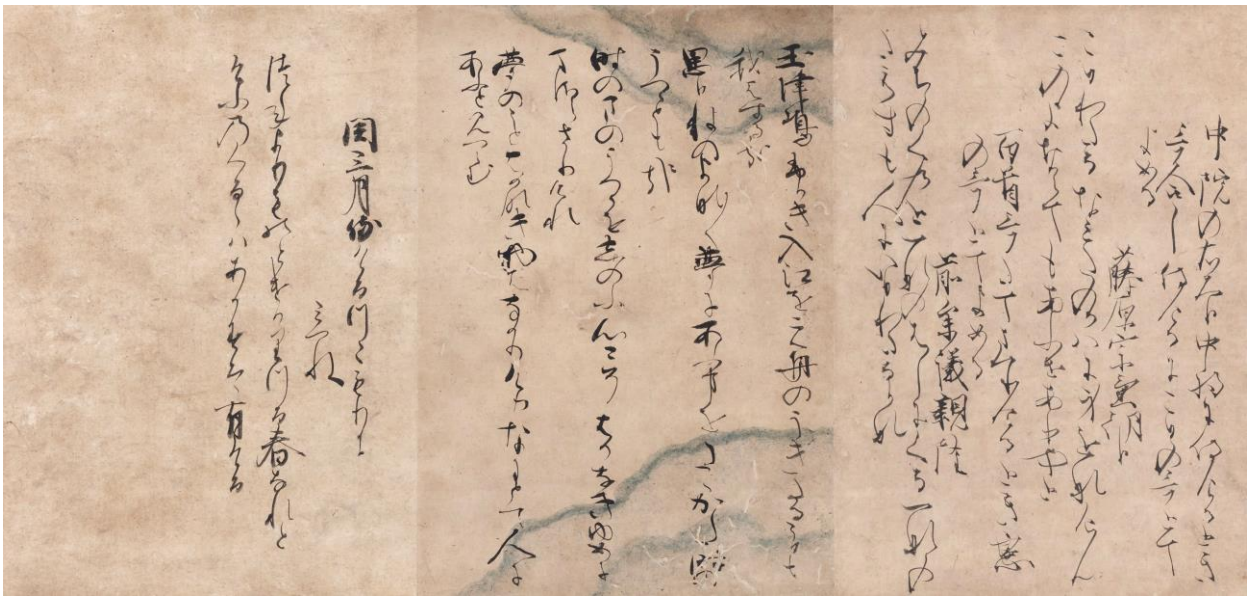
謹捧金簡、令難
奏之処、速蒙
恩許、三春之悲欝、
忽令解散給、恐悦無
極候也、

あしたつは　くもゐを
さして　かへるなり　けふ
おほそらの　はるゝけし
きに

夜鶴之鳴声、争
不垂情哉、此旨早
可令達給之也、依
天気如件之状、定長
誠恐々惶謹言

　　迺刻　　定長

二条家三卿之芳翰　一幅



（日野切）

中院の右大臣中将に侍けるとき、
歌合し侍けるに、こひの歌とて
よめる

藤原宗兼朝臣

こひわたる　なミたのかハに　身をなけん
このよならても　あふせありやと

百首歌たてまつりけるとき、恋
の歌とてよめる

前参議親隆

みちのくの　とつなのはしに　くるつなの
たえすも人に　いひわたるかな

（後撰集切）

玉津島　ふかき入江を　こく舟の　うきたるこひも
我はする哉
思ひねの　よな〳〵夢に　あふ事を　たゝかた時の
うつゝとも哉
時のまの　うつゝをしのふ　心こそ　はかなきゆめに
まさらさりけれ
夢のこと　はかなき物は　なかりけり　なにとて人に
あふと見つらむ

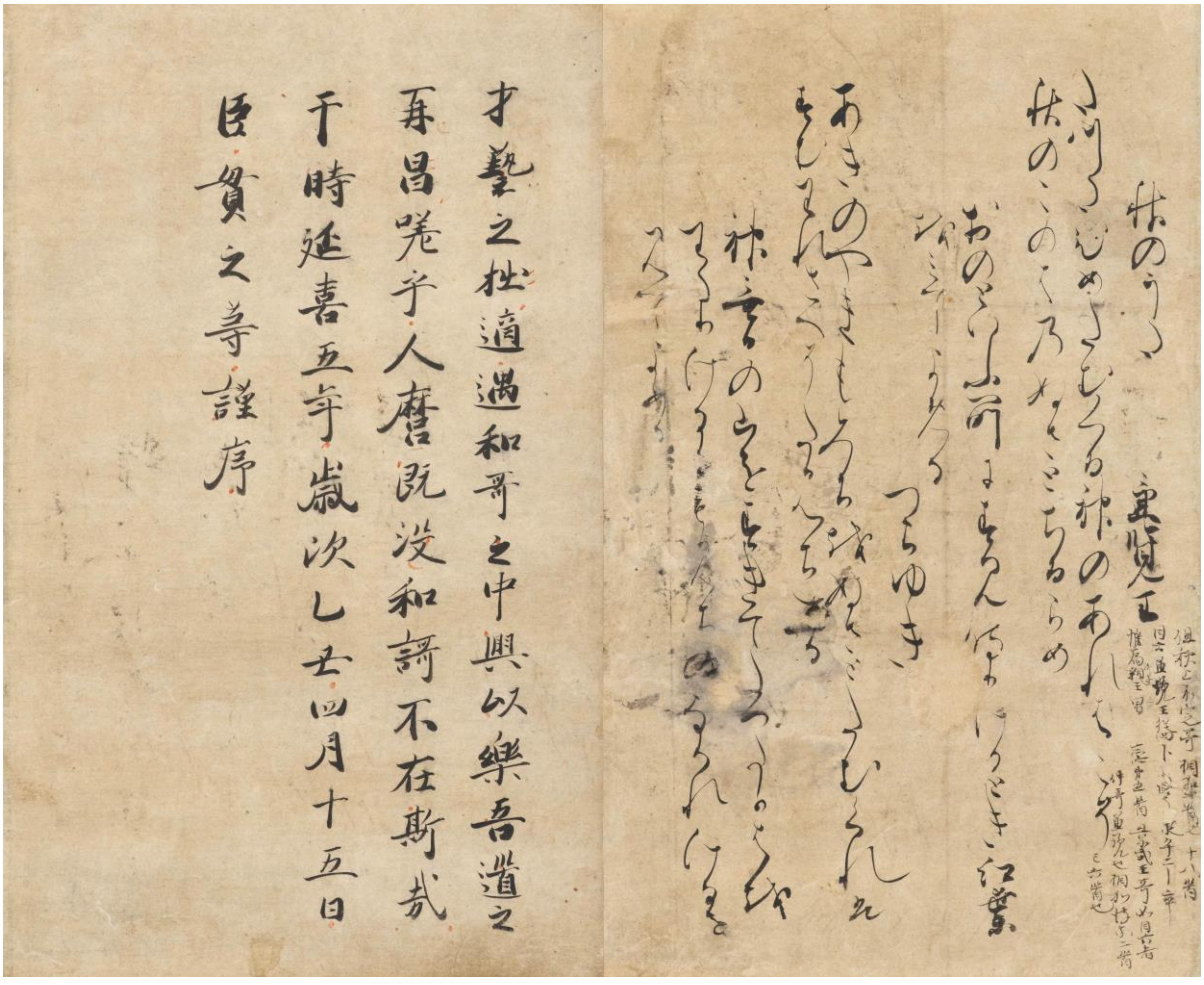
（拾遺集切）

閏三月侍けるつこもりに

みつね

つねよりも　のとけかりつる　春なれと
けふのくるゝハ　あかすそ有ける

古今和歌集巻五・真名序断簡（御家切）　一幅



（巻五断簡）

秋のうた　　兼覧王

たつたひめ　たむくる神の　あれはこそ
秋のこのはの　ぬさとちるらめ

おのといふ所にすみ侍けるとき、紅葉をみてよめる

つらゆき

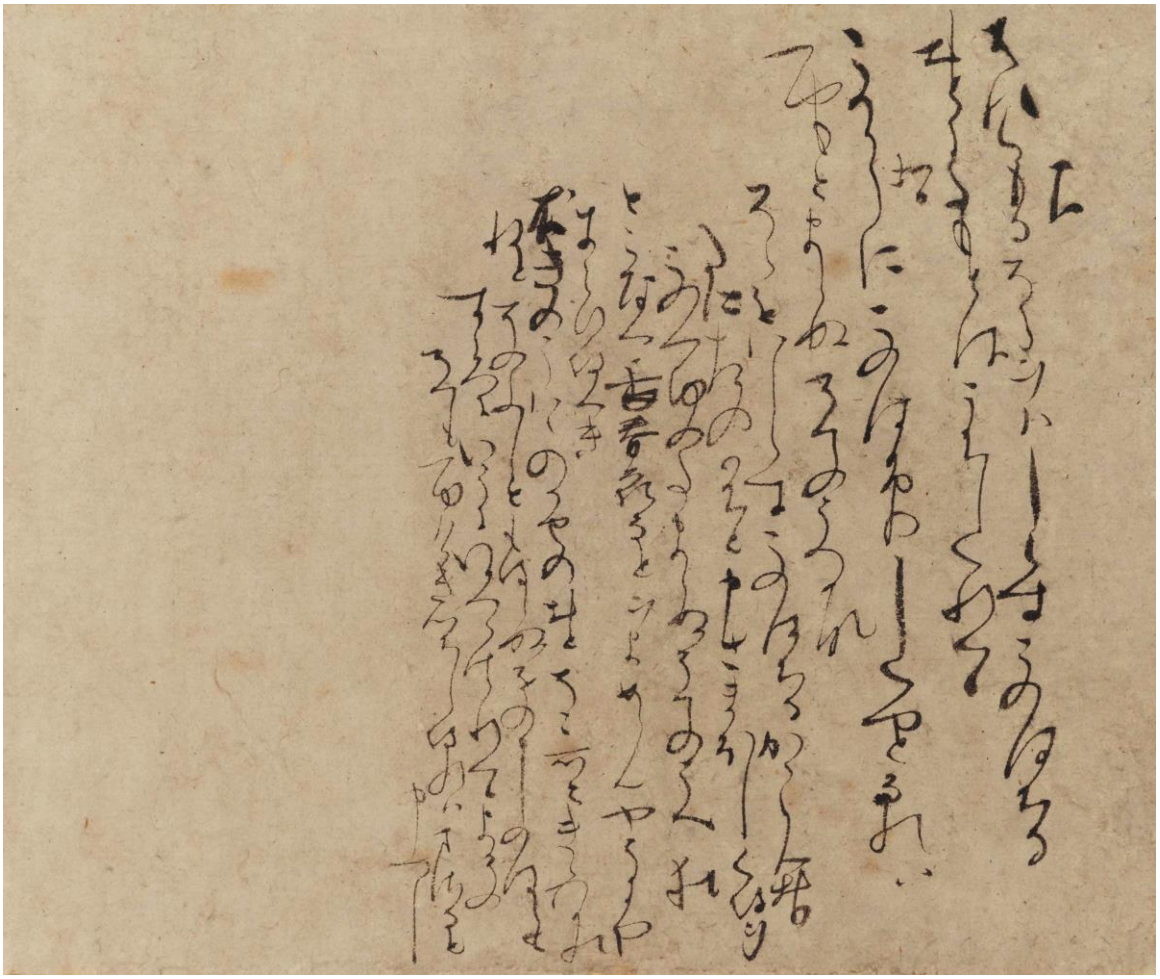
あきのやま　もみちをぬさと　たむくれは
すむわれさへそ　たひ心ちする

神無日の山をすきて、たつたかはを
わたりけるに、もみちのなかれけるを
見てよめる

（真名序断簡）

才藝之拙、適遇和歌之中興、以楽吾道之
再昌、嗟乎、人麿既没、和歌不在斯哉、
于時延喜五年歳次乙丑四月十五日
臣貫之等謹序

通具俊成卿女歌合断簡（歌合切）　一幅



左

はれくもる　そらヲハしらす　このはちる
おとにたもとは　うちしくれつゝ

右

こからしに　このはふりしく　やとなれハ
つゆもとまらぬ　そてのうへかな

そらをハしらすこのはちる、かゝらんおり
たに、左のかちと申さまほしく侍ヲ、
このつゆのたまらぬそてのうへ、猶

（左側は別の丁の断簡）

とこなつ香春花なとヲよめらんやうにや
きこえ侍へき、
おきのうハゝのかせのおと、そこ所ときゝわかれ
ねと、そのふしとも侍らぬをのゝしのはらも、
すゝろにいうにいひつゝけられて、よその
そてもつゆけき心ちし侍ハ、まさると申へし、

後撰和歌集巻十五断簡（紹巴切）　一幅

道風

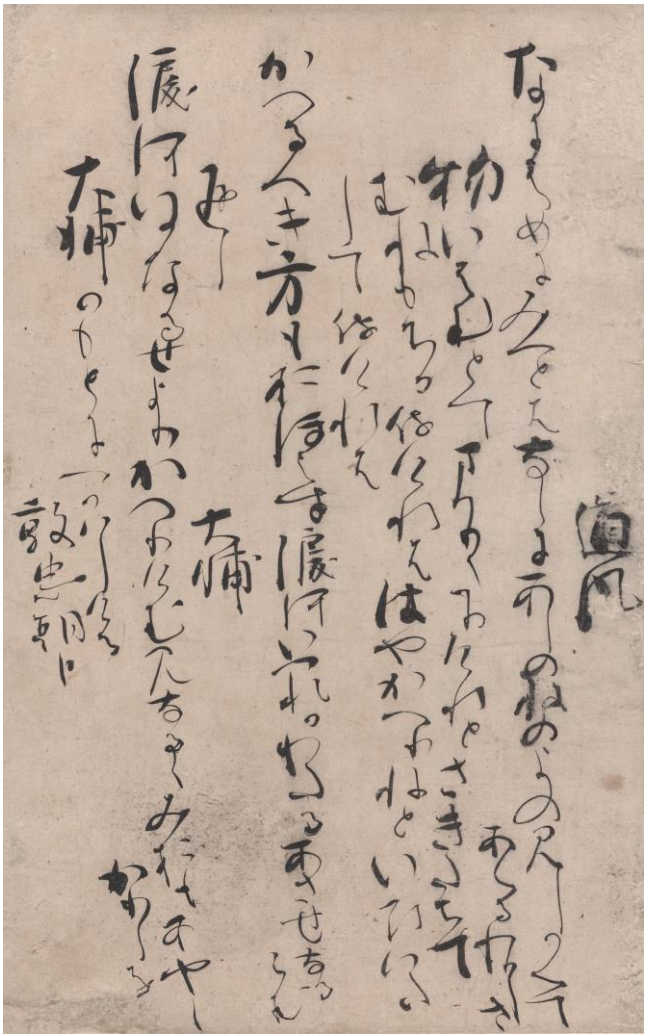
なにはめに　みつとはなしに　あしのねの　よのみしかくて
　あくるわひしさ

物いはむとてまかりたりけれと、さきたちて
むねもちか侍けれは、はやかへりねといひいたし
して侍けれは

かへるへき　方もおほえす　涙河　いつれかわたる　あさせなる
返し　大輔　らむ

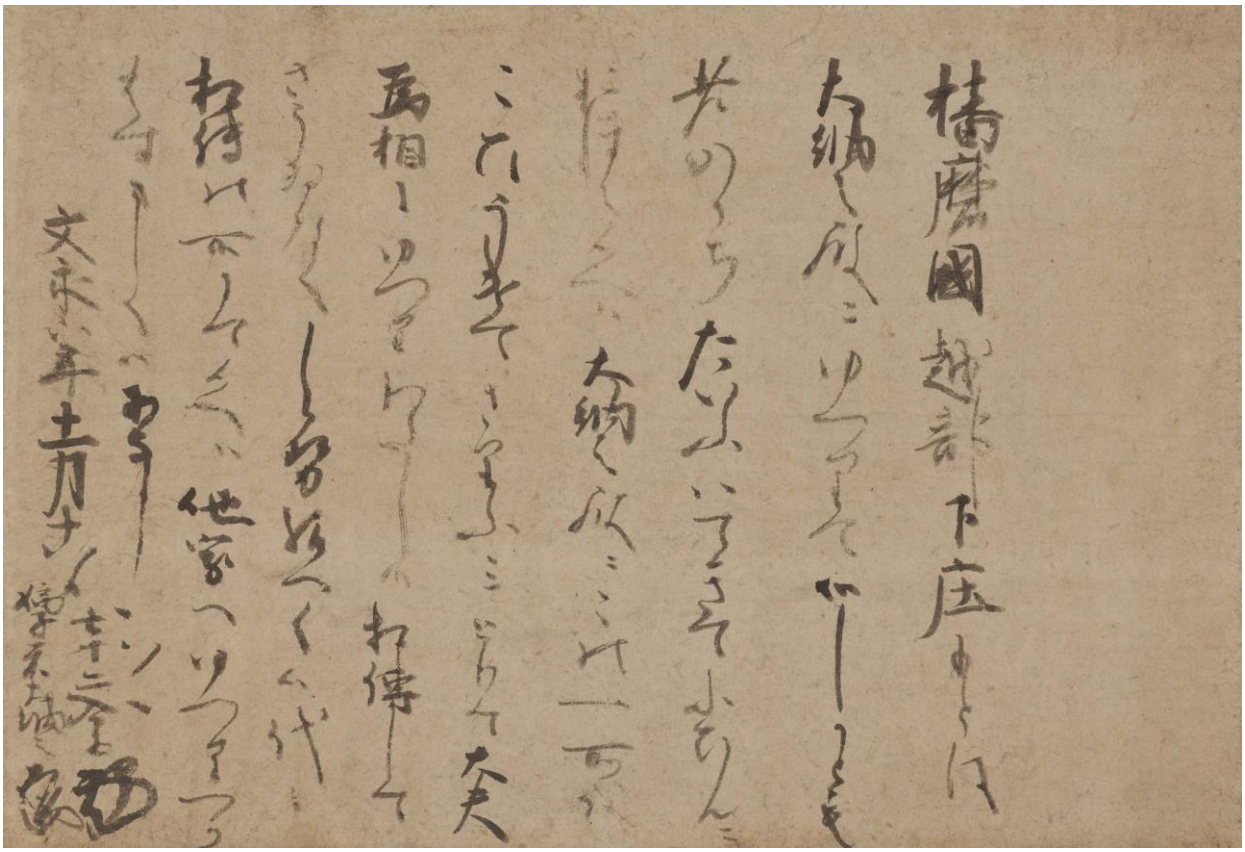
涙河　いかなるせより　かへりけむ　見なるゝみおも　あやし
大輔かもとにつかはしける　かりしを

敦忠朝臣



重要文化財

譲状　藤原為家筆　藤原為氏署判　一幅



播磨国越部下庄、もとは
大納言殿ニゆつりて候しかとも、
老のゝち、たいふいてきてふひんニ
おほえ候へハ、大納言殿ニこの一所を
こひうけて、さりふミとりて大夫
為相にゆつりわたし候、相伝して
さうゐなくしらせ給へく候、代々
相伝の所にて候へハ、他家へゆつりつか
はすましく候、あなかしこ〳〵

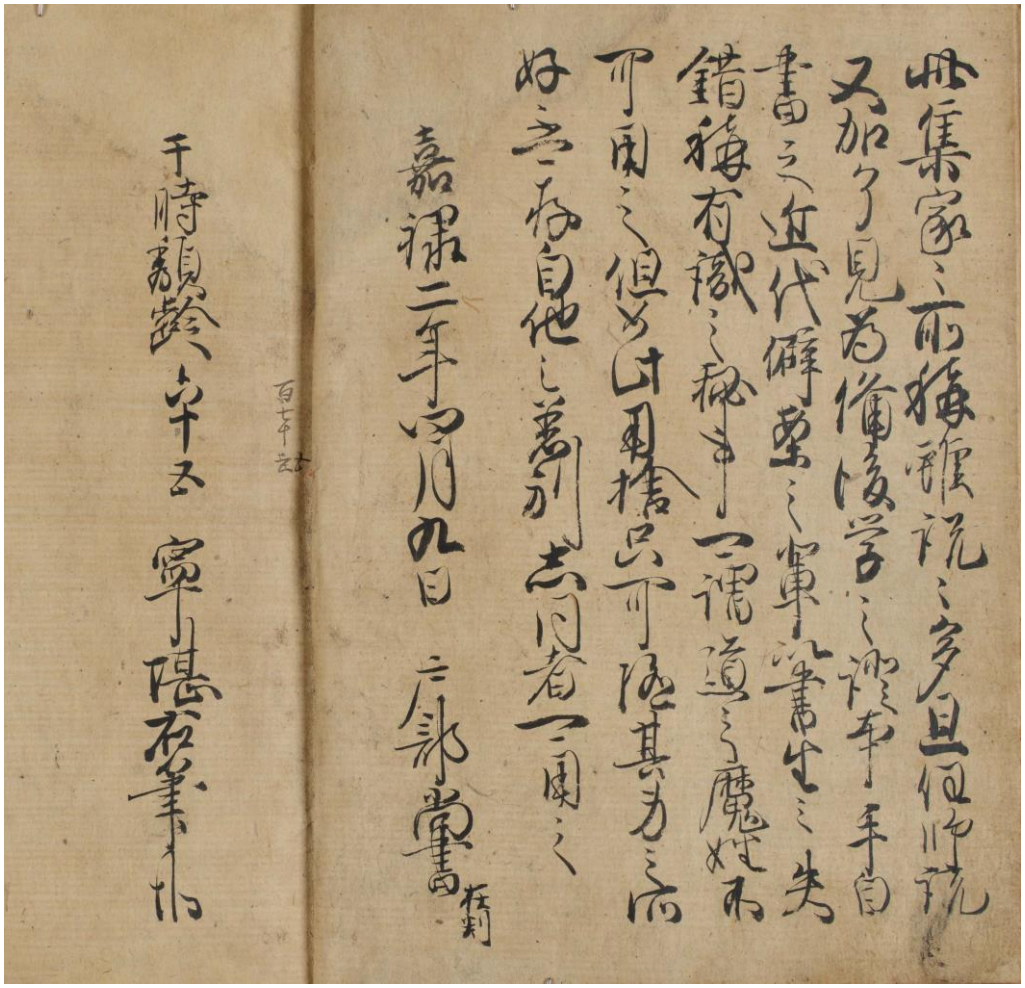
文永六年十一月十八日　七十二入道（為家花押）

嫡子前大納言（為氏花押）

古今和歌集（嘉禄本）　長享二年（一四八八）写

二帖（部分）

（下帖、定家本奥書部分）



此集、家々所称、雖説々多、且任師説、
又加了見、為備後学之証本、手自
書之、近代僻案之輩、以書生之失
錯、称有識之秘事、可謂道之魔姓、不
可用之、但如此用捨、只可随其身之所
好、不可存自他之差別、志同者可用之

嘉禄二年四月九日　戸部尚書在判

于時頽齢六十五、寧堪右筆哉